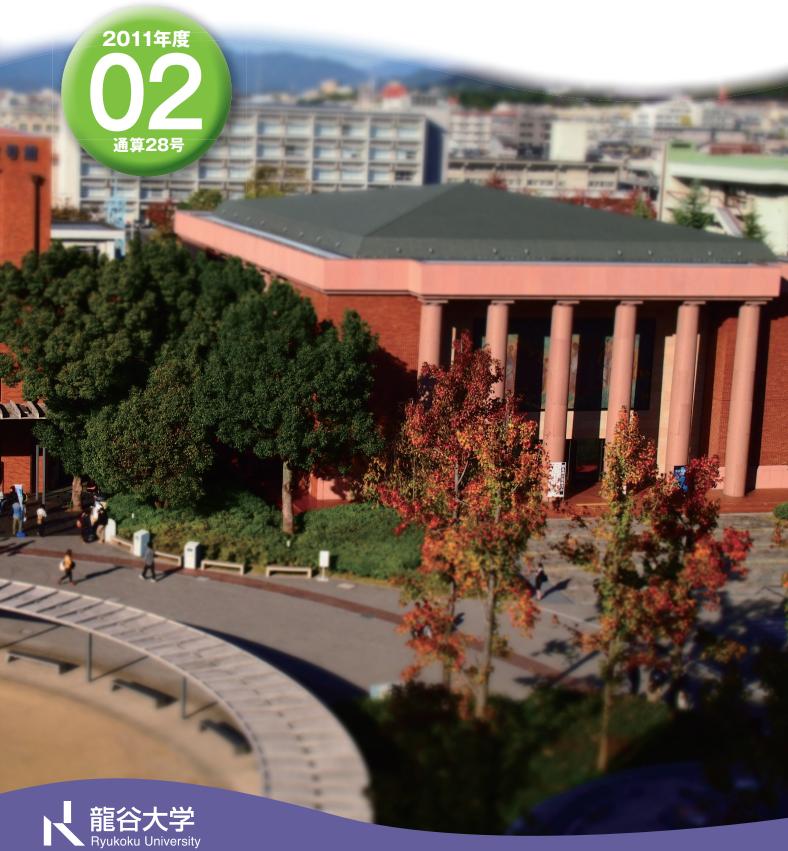
龍谷大学

大学教育開発センター通信

Ryukoku University Center of Educational Development Report





2011, Number **02**

CONTENTS

第7回 龍谷大学 FD フォーラム 2011 開催 p3

- 【特集】 p4 村岡倫学生部長、長谷川岳史大学教育開発センター長対談 「正課十課外=学生生活?―龍谷大学の学修支援のあり方―」
- 2011 年度指定研究プロジェクト NOW
- 学部 FD 活動紹介 文学部 杉岡 孝紀 (文学部 FD 活動推進委員会委員長) p10 大学院 FD 活動紹介 理工学研究科 林 久夫 (理工学研究科教務主任)
- p11 2011 年度大学教育開発センター活動紹介
- p12 学内外 FD 関連イベントのご案内 新着図書紹介

第7回龍谷大学 FD フォーラム 2011 開

第7回龍谷大学 FD フォーラム 2011 を開催いたします。参加をご希望の方は、メールに氏名、所属、電話番号、メールア ドレスを記入して、12月21日(水) までに大学教育開発センター(fd-ryukoku@ad.ryukoku.ac.jp) までお申し込みください。



いま、大学は、高度な専門性を有した自 律的な人材育成と教育の「質」の保証を求 められている。その一方で、大衆化にとも なう学生の多様化に拍車がかかり、学力や コミュニケーション力の低下、就職状況の 悪化など、大学は深刻な問題を抱えなが ら、ラーニングコモンズやライティングセ ンターなど、新たな支援環境の整備や教育 改善といった対処に追われている。

礼 龍谷大学

様々な環境の変化に対応しつつ、高等教 育機関が発展していくためには、本当は何 が必要なのであろうか。

今回のフォーラムでは、「学びのコミュ ニティーをデザインする」というテーマの もと、学びの「空間」設計とそこに描かれ るコミュニティーが大学教育にどのような 影響を与えるのか、これからの大学のある べき姿について考える。

2011年 12月23日(金·祝) 13:30~16:30

龍谷大学 深草学舎3号館 201数室

事前申込 参加費



学がの空間が大学を変える

山内 **祐平** 氏(東京大学大学院情報学環准教授)

この100年、大学の学習空間にはほとんど変化がなかった。社会から高度な専門性を持つ自律的人材の育成が要請されている 現在、大学の学習空間はどうあるべきなのだろうか。能動的学習を支援する新しい形の教室「アクティブラーニングスタジ オ」、図書館を情報を活用した学びの場に変える「ラーニングコモンズ」、対話によって大学を社会に開く「コミュニケーションスペース」の動向を通じて、学習空間から今後の大学像を考える。



~学生達の意識の変化から~

土山 惣一郎氏(株式会社類設計室 取締役・大阪設計室長)

学生の学修支援環境について

村岡 倫氏(龍谷大学 学生部長・文学部教授)

バネルディスカッション 山内 祐平氏 土山 惣一郎氏 村岡

コーディネーター 長谷川 岳史 (龍谷大学 大学教育開発センター長・経営学部准教授)

龍谷大学 大学教育開発センター

後援 公益財団法人大学コンソーシアム京都 全国私立大学FD連携フォーラム

協賛 関西地区FD連絡協議会

参加申込方法

参加をご希望の方は、FAX又はメールで 氏名、所属、電話番号、メールアドレスを記入して

12月21日(水) までに お申し込みください。

龍谷大学 大学教育開発センター

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町 67 TEL (075)-645-2163 FAX (075)-645-2190 E-mail fd-ryukoku@ad.ryukoku.ac.jp



特

集

「正課+課外=学生生 一龍谷大学の学修支

2011年度第1号の赤松徹眞学長との対談に引き続き、今号では学生部長の村岡倫先生と 大学教育開発センター長の長谷川岳史先生に、本学の学修支援のあるべき姿について語っ ていただきました。

対談

学生部長村 岡 倫

大学教育開発 長谷川 岳史



村岡 倫 学生部長(文学部教授)

本学の学生の現状と本学の政策について

長谷川 今日は、まず学生部の目線から見た本学の学生像について、現状の認識をお聞かせ頂き、正課と課外という枠組みを超えて、本学の学生に対してどのような支援を行えるかについて考えていきたいと思います。

学内ではどうしても、課外は学生部、正課は教学部や各

学部教務課の管轄という縦割り的なイメージが根強いと思う のですが、いかが思われますか。

村岡 同感です。学生生活には、授業だけではなく、課外 活動、アルバイト等様々な要素が含まれ、全てがリンクして いますから、部署間の連携が必要です。

長谷川 本学の政策上も、「正課=教育、課外=サークル活動」と、明確に区別している部分があり、果たしてそれでいいのかという問題が、色々な面で生じていると思うんですよ。 村岡 学生部には、サークル活動の支援、なんでも相談室等の事業がありますが、1番の課題は第5次長期計画でも言及されているように、課外活動の活性化です。要するに、課外活動の活性化が、学生の活性化につながるという考え方です。サークルの競技実績が向上し、学生が応援に行く。また新聞等のメディアに取り上げられる。「わが龍谷大学も頑張っているなあ」と帰属意識を高めるという方法論です。

長谷川 一方、教育では、単位の実質化ということが言われ、 授業時間プラス予習復習の時間を確保せよと声高に叫ばれて います。

村岡 サークルを強化しようと思うと、当然練習時間が長くなり、授業に対する影響が生じてくると思います。試合で授業を休み、授業についていけなくなるということもあり、そこをどうするかという悩ましい問題があります。

サークル活動と進路について

長谷川 大学でもだんだんサークルに加入する学生が少なくなっているように思います。例えばアメリカのようにカレッジスポーツが盛んな国では、最後の社会への出口のところまで面倒を見ますよね。入試の段階から卒業まで、学生生活を通じて、手厚いフォロー体制を敷く必要があるのではないでしょうか。

活? 援のあり方―」

村岡 確かにそうですね。サークルに加入している学生は、 礼儀正しいし、役に立つと積極的に企業が採用している時代 もありましたが、現在はそういった傾向は無くなってきていま す。学生もダブルスクールや資格取得で忙しく、サークル活 動に費やす時間が少なくなっています。

長谷川 学生の方も、我々が「正課」と「課外」を区分して しまうように、大学生活の様々な要素を峻別し、優先順位を 付けてしまっているのではないでしょうか。

世の中が、就職率や、キャリア形成について口やかましく 言うから、授業は一応卒業も見据えてそれなりに重視するけれど、課外活動やサークルは何の役に立つのかという雰囲気になっている気がします。

根拠のない妙な、効率主義の中で、学生が自らの主体的 行動への自信を徐々に失っていくという悪循環に陥っている のではないかと思います。

村岡 課外活動の活性化という大学の方針のもと、学生に対して、課外活動を通じて「きらりと光るもの」を身に付けられるようにしなければなりません。

第一線でスポーツ選手として頑張っていた学生が、スポーツとは関係のない職業で活躍している例もあります。課外活動に打ち込んできた学生は、潜在的な「何か」を持っているのではないでしょうか。

長谷川 本学では、現在「龍谷スタンダード」について検討中ですが、趣旨として正課と課外を融合したものを想定しているようです。でも、やっぱり課外活動の支援策と、正課に関する内容を分けて考えてしまう傾向がありますよね。高等教育機関として、正課と課外等の教育活動全体を、一体のものとして有機的に検討・推進しようという構造になっていないんです。結局、正課については教学責任主体で検討し、課外活動については学生部で検討するという認識に陥ってしまっている。大学内での認識も、社会の状況も、正課・課外が有機的に結びついていないということが問題です。

村岡 学生部では、サークルと、奨学金の担当が同じ学生 部にあることを問題視しており、サークル支援のオフィスを別

途設けることを希望しています。奨学金に関する業務が増える中、他大学では、スポーツ支援オフィスやセンターなどの特化した部署を設けている大学は増えています。

長谷川 そうなんですか。課外活動への支援に集中できる 体制作りも重要ですね。

課外活動支援の目的について

村岡 話は少し変わりますが、本学のブランディング等の宣伝効果のために、スポーツの課外活動を強化すべきという考え方があります。もちろんスポーツの活動の目的の一端にはそういった要素もありますが、基本的な考え方として、学生や教職員、保護者や卒業生、地域の方々全員が応援したくなるようなサークルになることが最も重要だと思います。そして、スポーツに打ち込む学生生活を送ってきた学生が、社会でどのように活躍してくれるかに主眼を置いて学生を育てようとしないと、考え方が偏ってしまいます。

長谷川 サークルの組織的な面では、活動を通じ、様々な「コミュニティー」が生まれることが一つの特徴であると思います。運営が軌道に乗って良い状態になると、新たに加入

した学生が次の世 代に成果を継承し ていくという相乗効 果、いわゆる「伝統」 が生まれてきます。

村岡 この前の日曜 日、茶道部の60周 年記念祝賀会という 行事があって、学長 と一緒に参加しました。70歳位の卒 生の方から現役の 学生までが集まる 行事です。



長谷川 岳史 大学教育開発センター長 (経営学部准教授)

本学の職員の方にも茶道部出身の方が何人かいたり、私の同じ学科の同期や私の授業に出ていた卒業生がいたりしました。大学時代の思い出によって結び付き合って、卒業して何年経っても本学へ足を運んでくださる方がいることに感銘を受けました。そういった人と人の繋がりが大事ですね。

長谷川 本学のサークル活動を通じ、卒業生同士がずっと 関係を結べていることが非常に素晴らしいですね。

村岡 サークルの活動を通じて学生が身に付けていることは、座学で学ぶものとはまた異なると思います。みんなサークルに入っているから、と加入する学生も多いかと思いますが、加入して良かったという学生が大半なのではないでしょうか。 長谷川 考えてみたら、サークルがそれぞれの歴史の中でポリシーを持っているわけで、無駄なサークルはないですよね。サークルの魅力は、やはり新入生には、十分に知らせておくべきです。正課と課外を学生生活の両輪と捉えず、「授業至上主義」「単位至上主義」のような考え方が横行しています。もちろん一生懸命授業の充実や単位の実質化に取り組むべきではあります。しかし、学生の時間は限られており、心の余裕もなく、もう少しゆっくり人生の選択肢を検討したくても、とりあえず背中を押されて前に進まざるを得ない状況があるのではないでしょうか。

村岡 サークルに参加する学生の減少、授業が終わっても



キャンパスに滞在せずすぐ帰宅する学生の増加も、そういった要因が生み出している気がします。やはりサークルで学ぶ、私も学生時代に準硬をしていましたが、決断ではまったが、接案力等、授業ないことを学びました。

長谷川 サークル等の課外活動に参加し

ない理由を「忙しいから」と言う学生も多いですが、本当に 必要なことをしようとして忙しいのか、分からない部分があり ます。勉強にしても、サークルにしても、その他の活動でも、中途半端で終わると結果として何も残らず、大学時代ってなんだったのか、という話になってくるのではないでしょうか。 村岡 効率性のみを重視すると、本質的なものを見失ってしまうこともありますね。

長谷川 図書館を例に取ると、我々の時代は検索の方法として「蔵書カード」を繰る中で、探している本とは別の本について記載したカードを偶然手に取り、予想していなかった情報を得ることが出来、そこから多くのことを学びました。余計な作業なのかもしれないですが、ある意味で大事な部分でもありました。様々な機器が発達し、便利になりましたが、直線的にしか物事を捉えられなくなる可能性もありますね。

学生の「居場所」について

村岡 そうですね。我々が学生だった頃と比べて、一番衰えたと感じるのは、学生同士の会話力です。

長谷川 授業でしか他の学生に会わない学生も増えている 可能性もありますね。昔は図書館に行くと、毎日勉強に来て いる連中と仲良くなりました。当然館内は会話禁止なので、 外へ出てしゃべっていましたが。

村岡 今は家からでも休講情報が把握できるので、休講だと学生はキャンパスへ来ないですよね。やはりキャンパスに来ることによって、コミュニケーションが図れる部分もあると思います。コミュニケーションにおいてもう一つ重要なことは、授業が終わった後の居場所の問題です。キャンパスが手狭になってきている上に、建て替えなどの改修工事もあります。授業の空き時間に学生の居場所のない現状が更に悪化する可能性があります。

長谷川 授業をする教室が確保できればそれでいい、という 問題ではないですね。キャンパスの中に学生の居場所を早急 に作る必要があります。食堂も収容人数ぎりぎりなんでしょう。 村岡 一杯ですね。深草学舎でも、食堂はあっても、昼になったらキャパシティを超えてしまい、みんな食堂からトレイを持って来て、近くの教室で座って食べているんです。 大宮学舎で

も同じ状況があります。

長谷川 学部や授業が一緒では無い学生が、ある程度集まり、交流できる空間が必要です。居場所を物理的につくるだけでなく、学生が大学に居る必要性を感じるような「仕掛け」が必要です。そこに行ったら友達がいる、ここに行ったらこんな活動がある等の、面白いコミュニケーションが取れる仕掛けです。単に場所だけつくるのでは「いや、それだったら四条のネットカフェへ行く方がいいわ」となってしまいます。 村岡 そうでしょうね。仕掛けの一つとして、無料のドリンク

長谷川 今、人気があるスペースに置いてもよいかも知れませんね。

のサーバーを設けるなんていうことも考えられますね。

サークルに所属する学生への 指導について

長谷川 学生部が提唱する、サークル等の課外活動の強化のためには、サークルに所属する学生への、教職員のサポートが不可欠です。サークルと学業を両立させる責任は基本的に大学にあるのではないかと思います。そもそも両立できると見なした学生を入学させているはずですので。

村岡 学業との両立は、学生の方が学業に対する意識を高く持っていることが大前提ですが、学生部としては、「サークルを頑張っている学生は、競技等に費やす負担も大きいが、得られる成果も大きなものである」という学内のコンセンサスを得た上で、協力を要請することが重要だと考えています。

長谷川 スポーツでいい成績を残している学生は、基本的にスポーツだけでなく様々な分野の能力のある学生であると思います。その学生に対し、学業に対する興味関心を育て、伸ばしてあげなければいけない。皮肉なことに、昔はサークルにばかり学生が打ち込むことを問題視していたのに、今はサークルに参加する学生が少なくなっていることを問題視しています。

一方で、単位の実質化のために、学生が予習復習する時間を大学が確保しなければならず、そうするとますます課外活動をする時間は少なくなります。

学力について

村岡 単位の実質化のため、半期15コマの授業、予習復習等、我々が学生の時代とは、学修に関する社会的要求や状況が全く異なっています。しかし、われわれが今の学生より学力が劣っているかというと、そんなことはないですよね。長谷川 結局、考え方として授業の成果を、授業を



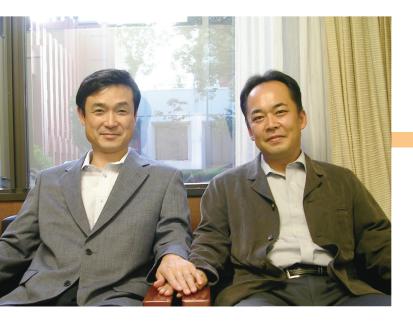
行った時間や回数で換算しまっているんですね。

村岡 そのことが、逆に学生の余裕をなくしているような気がします。自分で図書館へ行って本を見たり、友達同士でいろいろ議論することが、様々な時間的制約で困難になっている。本質的な学修のあり方については、社会全体で十分に議論を深め、コンセンサスを得ていかなければならない。

長谷川 確かにそうですね。現在議論されている内容を見ると、効果を上げようとするまでのスパンが短すぎます。時間のかかる、本来最優先しなければいけない、今話したような内容のことは先送りになってしまい、取りあえず手をつけられるところから手をつける風潮になっていますよね。

村岡 学生を入り口から出口まで全ての要素で、トータルでサポートするという観点がなければいけません。サークルはサークル、授業は授業、就職は就職という形で切り分けて考えているようでは、様々な問題が生じます。

長谷川 サークル活動、学業等、その他の課外活動等、学生個人が学生生活において蓄積した様々な魅力を、学生はうまく表現することができていないのではないでしょうか。就職活動のような場面で社会との接点を見つけられないまま、面接用の自分をわざわざつくり込んで、他の魅力的な部分をそぎ落としてしまうから、悪循環になっている。学生個々の魅力を表現するサポートを大学が十分にできているかというと疑問です。



指定研究プロジェクト「学生の学修支援 環境に関する研究」と FD フォーラム について

長谷川 本学には色々と、学生を支援する施設・設備、制度 が揃っているように見えますが、実際の機能や活用法を学生 に十分に伝えることができていないように見受けられます。各 部署が取り組みを個々に発信するので、結局は分散された情 報として学生へ届きます。例えば、図書館、情報メディアセン ター、ラーニングクロスロードといった場所は、学生にとって は学修に関する一連の施設として認識されていないですよね。 個々の設備が一連のものとして十分に活用されていないとい うことは、学修支援について本学が多くの取り組みを行って いるという認識は、厳しい言葉で表現すれば「勘違い」と言 えるかもしれません。

村岡 そうですね。

長谷川 本年度、村岡先生に指定研究プロジェクト「学生 の学修支援環境に関する研究」で研究いただいている「学 修支援マップ」は、本学の学修に関連する情報を一つのマッ プにまとめる試みです。

村岡 現在、作成したプロトタイプをもとに、議論を深めて います。マップに掲載されている施設・設備についても、授 業に関すること、履修に関すること、課外に関することといっ たようにカテゴライズし、学生に提示する予定です。プロトタ イプを作成して感じたことが、本学のキャンパスには学生のコ ミュニケーションスペースが少ないということです。

長谷川 予復習、サークル活動等、何らかの目的がある学 生の居場所はあるけれども、そうではない学生が自由に語ら うコミュニティーとして機能する場所が果たしてあるのか疑問 です。大学教育開発センターが主催し、12月23日に、「学 びのコミュニティーをデザインする」というテーマで第7回龍

谷大学 FD フォーラム 2011 を開催します。東京大学大学院 情報学環の山内祐平先生をお招きし、コミュニティーという 観点から高等教育における学びについて再定義を行い、学 びの将来について考えます。フォーラムでは村岡先生にも指 定研究プロジェクトの成果について事例報告をしていただき ます。

村岡 本学における今後のキャンパス構想でも、学生を収容 する教室を作ることだけに主眼を置くのでなく、学生のコミュ ニケーションを生み出すコミュニティーとしてキャンパスを捉え る視点が必要です。

長谷川 確かに、これまで大学がつくってきたのは、目的が ないと居ることができないような場所が多くなっている気がし ます。我々が学生の頃は喫茶店や居酒屋、教室等で自分た ちの居場所を勝手に見つけてきた部分がありますが、状況 が全く異なる現代の学生に対しては、ある程度大学主導でコ ミュニティーの形成を促さないといけないのかもしれません。

おわりに (魅力ある大学とは)

長谷川 本学が魅力のある大学として選ばれるためには、結 局個々の部署が色々な施設・設備、サービスを作るよりも、 これだけはうちでは必ず買ってほしいというような魅力作りを、 ポイントを絞って行うことが大事だと思います。

村岡 仰るとおりです。だいたい、色々なメニューがあるラー メン屋っておいしくないですからね(笑)。

長谷川 私も、ラーメンは好きなんだけど、トッピングやサー ビスが過剰にある店が苦手なんです。「これがうちの味」と いうラーメンを売りにしている店にどうしても行ってしまいま す。「替え玉もできます」とか「トッピング無料」と言われると、 普通のラーメンだけでは損なのかなと思ってしまい、その店 に入る気がしない。

村岡 なるほど、そういう部分もありますね。確かに自信の あるラーメンだけを売るということも一つの選択です。大学の 話に置き換えて考えても、学生に、本質的な魅力で評価され る大学がいいですよね。

長谷川・村岡 ありがとうございました。

(了)

指定研究プロジェクトとは、大学にとって必要な教育 開発研究をおこない、より教育効果の高い教育を実践す るための基盤づくりを進めることを目的に、大学教育開 発センターが指定する教育開発に関するテーマについて 研究する事業で、2004年から実施されています。

指定研究プロジェクト「WEB 履修登録・WEB シラバス・授業アンケート機能を包括した『学修記録(仮称)』の構築」(2011~)

研究代表者

長谷川岳史(経営学部准教授、大学教育開発センター長) 共同研究者

出羽孝行(文学部准教授、学部 FD 運営委員会委員)、 小長谷大介(経営学部准教授、学部 FD 運営委員会委員)、 佐々木英昭(国際文化学部教授、学部 FD 運営委員会委員)、 小室昌志(法学部教務課長)、栗田洋(政策学部教務課長)、 西坂正雄(情報メディアセンター事務部課長)、河村由紀彦 (教学企画部課長)

本プロジェクトは、教員が学生の学修実態を統括的に 把握するため、また、学生自身が学修過程を振り返るこ とができるようにするために、教育に関する支援ツール の統合について研究しています。

これまでに学生の学修の振り返りや、教員個々の自己 点検や授業改善に資するよう、全学的な共通のツールで ある Web 履修登録・Web シラバスを起点とした、「学修 記録」(仮称※学生側からみた名称)の構築について検討 しています。

また、「学修記録」を補完・蓄積するための共通ツールとして、現行のWebシラバスシステムにアンケート機能を追加することで、集計結果の蓄積や、個々の授業におけるインタラクティブな環境の確保を見込んでいます。

指定研究プロジェクト「学生の学修支援環境に関する研究」(2011~)

研究代表者

村岡倫(文学部教授、学生部長)

共同研究者

寺島和夫(経営学部教授、前情報メディアセンター長)、神吉正三(法学部教授、学部 FD 運営委員会委員)、新田光子(社会学部教授、学部 FD 運営委員会委員)、田岡由美子(短期大学部准教授、学部 FD 運営委員会委員)、井上弓子(図書館事務部課長 < 深草 >)、神牧宏次(図書館事務部課長 < 瀬田 >)



指定研究プロジェクト「学生の学習支援環境に関する研究」研究会の様子

本プロジェクトは、本学の学修支援環境が十分整っているのか、また機能しているのかを明らかにするため、 物理的な側面と制度的な側面から検証することを目的と して推進しています。

具体的には、図書館、情報実習室、ラーニングクロスロード(深草)、ライティングセンター(瀬田)等の様々な本学の学修支援環境について、実際の機能や活用法を、学生や教員が包括的に把握できるよう、「学修支援マップ(仮称)」を作成しています。

これまでに「学修支援マップ (仮称)」のプロトタイプをもとに、本学の学修支援環境の再検討及びマップの内容の精査を行っています。

∦ 指定研究プロジェクト「大学院における FD の実質化 に関する研究」(2011 ~)

研究代表者

クラフチック マリウシュ (経済学部教授)

共同研究者

北村高(文学部教授)、細川孝(経営学部教授)、脇田滋(法学部教授)、林久夫(理工学部教授)、大塩まゆみ(社会学部教授)、鈴木滋(国際文化学部准教授)、的場信敬(政策学部准教授)、深川宣暢(文学部教授)、中田邦博(法務研究科教授)、長谷川岳史(経営学部准教授、大学教育開発センター長)

本プロジェクトは、他大学の大学院が実施している大学院FDや文教政策に関する情報収集を通して、本学における大学院FD事業への活用を検討し、大学院FD活動の普及及び情報発信力の強化等、実質化へ向けた提言を行うことを目的として推進しています。

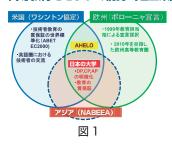
これまでに、本学の構成員や研究分野が多様化する中、全学的な意識やニーズを総合的に把握するための情報収集を行った上で、今後の大学院FD事業について検討していくべきであるとの一定の結論に至り、現在は情報収集の方法及び内容について検討を進めています。

大学院FD活動紹介 「理工学研究科における FD 活動」

林 久夫(理工学研究科教務主任)

世界中で吹き荒れるグローバル化の嵐の中、高等教育もその影響 を免れることはできません。特に理工系の大学院教育は、図1に示 すように米国、欧州、アジアの三方向からの影響を強く受けていま す。これらの外的要因に迎合するのではなく、主体的な立場から国

高等教育をとりまく情勢(理工系)



際的に通用する大学院教育を 実施していくため、質保証体 制の構築が強く求められてい ます。理工学研究科では、こ のような要請に応じて、日本 で最初の大学院 JABEE の認 定コース(化学および応用化 学分野) を開設しています。 学部と比較したとき、大学院

教育における質保証で考えるべきポイントは、①大学院では研究を 通しての教育・訓練が中心となるため学習量の保証が難しいことと、 ②教育が学部ほどには体系化されていないということです。一方で、 専門分野だけでなく周辺分野も含めた幅広い基礎知識の必要性が指 摘されており、それを習得するため体系的な授業(コースワーク) の充実が求められています。最近、修士論文を作成しなくても修士 号が取得できるよう省令を改正しようとする動きがあるのも、この ような視点に立ったものと思われます。

以上の観点から、JABEE 認定コースである物質化学専攻では、改 革の基本方針として、「明確な目標の設定」、「厳格な成績評価」、「学 習時間(64単位相当)の保証」に加えて、「体系的カリキュラムの構築」

を掲げました。コースワークと研究のバランスをとるため、これま での研究偏重を改め、それぞれ32単位(相当)としました。また、コー スワークを充実させるため、分野共通の基礎能力は必修の授業で養 成することとし、必要な科目を新設しました。

新設科目の中には、高度な大型実験装置を駆使し、最先端の実験 技術が身につくように設計された実験科目や、総合的デザイン(創成) 能力の開発を目的に、海外拠点(RUBeC)で実地にプロジェクト企 画を学ぶ科目などがあります。これらの科目では、実験・演習・講 義を有機的に組み合わせてモジュール化し、単なる知識・技能だけ

ではなく実践的な応用力・ 問題解決能力をも培うこと ができるよう工夫がなされ ています。こうして、アラ カルト方式を中心とした従 来のカリキュラム(図 2a) は体系的なカリキュラム (図 2b) へと進化したので す。今後は、このカリキュ ラムの有効性を検証し、さ らなる改善を検討するとと もに、この改革によって生 じた教員の負担の軽減策を 講じることが課題です。



図 2a



図 2b (コースワーク部分)

学部FD活動紹介 「文学部における FD 活動の紹介」

杉岡 孝紀 (文学部 FD 活動推進委員会委員長)

文学部では、多様な学生に対するきめ細かな指導に重点を置いた学 生中心の教育への転換を図るため、FD 活動推進委員会を中心に FD 活動に取り組んでいます。本委員会の委員は教務委員会と重複してお り、7学科5専攻(2012年度開設の臨床心理学科を含む)と教養教 育から選出された教務委員 12 名より構成されています。ただし、教務 委員会が主として教務に関する日常の実務を行っているのに対し、FD 活動推進委員会は教育内容・方法・環境の改善といった中長期的な 教学的課題に取り組むことを目的としています。また、この委員会には 2010 年度から三つのワーキング・グループ (WG) ――カリキュラム WG、学修(教育)支援WG、大学院WG — が設置されています。 本年度は、昨年度のWGから出された答申を受けて、殊にカリキュラム WG では学科・専攻別のカリキュラム・マップ (CM) の作成、学修(教育) 支援 WG では単位僅少者指導のさらなる充実策の検討、そして大学院 WG では文学研究科 (MD) でのカリキュラムアンケートの実施を課題 として、教務委員会と連携して具体的な検討を進めています。2011年 度はこれまでに3回の委員会を開催し、また学部の教育活動に関する

情報交換や認識を共有す る場として「文学部FD研 究会」(FD 報告会を兼ね る)を2回開催(6月29日、 8月3日) しました。今後 はFD研究会の参加者を



第2回文学部FD研究会 (8月3日開催) の様子

増やすための改善方法を探ることが必要だと考えています。

なお、文学部では今年度から龍谷 GP「ラーニングアウトカムを具現 する『卒業論文の質保証』」をスタートさせました。 龍谷 GP では委員 会のもとに GP ボードを設け、学生主体の学修を支援する体制を構築 するためにアカデミック・ライティングセンター(ALC)の設置と、学生 が学びの成果を実感できるようにするために、アカデミック・リテラシー (AL) 及び卒業論文のルーブリックによる可視化・実質化を検討してい ます。特に深草における ALC の設置は、文学部における初年次教育 の充実のために不可欠なものであるため、FD 活動推進委員会などとも 協力し、実現に向けて努力しています。

2011年度 大学教育開発センター活動紹介

今年度、これまでに開催した各種研修等をご紹介致します。

※2011年11月現在

6月15日 第1回FD報告会

(2011年度第1回文学部FD研究会)

「厳格な成績評価基準の作成と方 法一卒業論文の評価をめぐる諸課 題―」をテーマとして開催されまし た。当日は、教員22名(アドバイ ザリーボード1名含む)、事務職員 5名の計27名が参加しました。



7月19日

第2回FD報告会

(2011年度第1回理工学部·理工学研究科FD報告会)

「2012年度カリキュラム改革に向 けたFD活動報告」をテーマとして 開催されました。当日は教員約70 名、事務職員5名(アドバイザリー ボードそれぞれ1名含む) が参加し ました。



7月26日 第3回FD報告会

(2011年度第2回文学部FD研究会)

「精神的・心理的悩みをもつ学生への対応」をテーマとして開催されま した。当日は、教員39名、事務職員11名の計50名が参加しました。

8月3日

■第1回 FD サロン

(新任教員フォローアップ研修)

フォローアップ研修として、長谷川岳史センター長を交えた新任教員 同士の意見交換会を開催し、各先生の抱える様々な課題や現状を把 握、共有するとともに、新任教員同士の交流を図りました。

9月14日 クリッカー説明・試用・講演

自己応募研究プロジェクト「授業の内容・形態に応じたクリッカーの 効果的な試用方法の研究 | (代表者: 樋口三郎〈理工学部〉) 主催で開 催し、クリッカーの使用方法の説明、実際に試用するとともに、京 都光華女子大学の阿部一晴先生に「大人数講義でのクリッカー活用 試行錯誤」というテーマでご講演いただきました。

9月28日

2011年度第4回FD報告会

(2011年度第1回理工学部·理工学研究科FD報告会)

「プログラム科目実施報告会」をテーマとして開催されました。当日は、 教員19名(報告者4名を含む)、事務職員6名の計25名が参加しま した。

10月12日

2011年度第1回経営学部FD報告会

「経営学部プログラム科目実施報告会」をテーマとして開催されまし た。当日は教員22名、事務職員3名の計25名が参加しました。

10月20日 第2回FDサロン

今年の8月に、就任4年目までの教員を対象として開催された日本私 立大学連盟主催「平成23年度FD推進ワークショップ」(テーマ:『大

学教員の職能開発とFD』)の 参加報告会を開催し、運営 委員を務めた長谷川岳史セン ター長と、研修に参加した政 策学部の岡本健資先生に当日 の研修内容をお話いただきま した。



2011年度公開授業及が講評会開催一覧(2011年11日租本)

2011年度公開授業及び講評会開催一覧(2011年11月現在)				
学	部	教 員 名	科 目 名 ———————————————————————————————————	開催日
経営学部		野間 圭介	経営とコンピューター利用	11月29日(火)
法学部		脇 田 滋	労働と法	11月18日(金)
理工学部	数理	池 田 勉	計算科学Ⅰ	10月3日(月)
		高橋 隆史	応用プログラミング演習	10月10日(月)
		樋口 三郎	現象の数学B	9月27日(火)
		馬青	アルゴリズム・演習	10月27日(木)
		松本 和一郎	偏微分方程式	10月12日(水)
		四ツ谷 晶二	確率統計・演習Ⅰ	11月14日(月)
		佐 野 彰	応用プログラミング演習	11月14日(月)
		宇土 顯彦	計算機基礎実習Ⅱ	11月25日(金)
	電子	石崎 俊雄	特別講義I	10月19日(水)
	情報	藤田 和弘	ディジタル信号処理	10月6日(木)
社会学部		荒 田 寛	精神保健福祉論Ⅱ	10月14日(金)
政策学部		富野 暉一郎	地方自治論	10月20日(木)
短 期 大学部		赤田 太郎	教育心理学	11月11日(金)
		川﨑 昭博、 伊藤 優子、 西井 正美	ソーシャルワーク現場実習 指導	11月29日(火)

新着図書紹介





「大学論」

(阿部謹也、日本エディターズスクール、1999.5)



「教師が薦める大学 改訂新版」

(小園修、エール出版社、2010.1)



「アクティブラーニングでなぜ学生が成長するのか

- 経済系・工学系の全国大学調査からみえてきたこと- 』 (河合塾編著、答信堂、2011.6)



「アカデミック・スキルズ 一大学生のための知的技法入門」

(佐藤望編著、慶応義塾大学出版 会株式会社、2006.10)



「大学教員準備講座」

(夏目達也他、玉川大学出版部、2010.3)



「おせっかい教育論」

(鷲田清一・内田樹・釈徹宗・平松邦夫、 株式会社 140B、2010.10)

図書貸し出しのご案内

大学教育開発センターでは、FD に関する様々な資料図書を購入しています。購入図書の希望も募っていますので、ご希望があればお知らせ下さい。(内線:1052、1050)

また、貸し出しをご希望の方は大学教育開発センター (dche@ad.ryukoku.ac.jp) までメールにてお申し込み下さい。学内便にて送付させていただきます。

<資料一覧> http://www.ryukoku.ac.jp/faculty/fd/siryou.html

学内外FD関連 イベントのご案内

大学教育開発センターでは、ホームページや、随時発行する「大学教育開発センターNews」を通じ、学内外のFDや高等教育に関する研修会等の企画を紹介しています。今後開催される今年度の主な企画は右記のとおりです。

学

2011年度第3回ICT支援セミナー

日時:2011年12月15日(木) 内容:moodleに関する講習会 場所:龍谷大学深草学舎5号館 301情報実習室

第7回龍谷大学FDフォーラム2011

日時:2011年12月23日(金・祝) テーマ:「学びのコミュニティーをデザイン

場所: 龍谷大学深草学舎3号館201教室

学 外

第17回FDフォーラム

日時:2012年3月3日(土)、3月4日(日)

場所:京都産業大学

主催:公益財団法人大学コンソーシアム

京都

第18回大学教育研究フォーラム

日時:2012年3月15日(木)、16日(金)

場所:京都大学

主催:京都大学高等教育研究開発

推進センター